

地面に死を蒔きつけて、もう一度
生を生え出させる
— シャーウッド・アンダソンの「トウモロコシ蒔き」を
読む (前編) —

**Putting Death Down into the Ground That Life Might
Grow Again:**

Sherwood Anderson's "The Corn-Planting" (Part 1)

儀 部 直 樹

GIBU Naoki

魂の行方 — 「トウモロコシ蒔き」論に入る前に

釈迦は、人間の八つの苦しみ「八苦」の一つとして「愛別離苦」という言葉を残しているが、われわれの人生において、愛する者との死別や生き別れほど、辛く苦しいものはないと言っても過言ではないであろう。この「愛別離苦」を無言で受け止める人間の姿を描いたのが、アメリカ人作家シャーウッド・アンダソン (1876-1941) が1934年に発表した短編小説「トウモロコシ蒔き」“The Corn Planting”である。この作品には、アンダソン独特の死生観が沈められている。これは、われわれが、生きている人間の肉体に宿された心や魂をどう捉えるべきかを問う、作品でもある。中西部の片田舎で農家を営む働き者の夫婦がいる。夫は七十歳に近く、妻は六十歳近い。この夫婦には一粒種の二十歳手前の息子がいる。息子はシカゴの美術学校に通っていて、そのずば抜けた画才と魅力的な人柄のため、いつもみんなの人気者である。夫婦は、この息子の将来を生きがいにし、毎日休むことなく黙々と畑仕事に精を出す。しかし夫婦はある日突然、この自慢の息子を交通事故で失う。最愛の息子の死をある夜に電報で知らされたこの夫婦は、深い悲しみを抱えながら、月明かりの畑にトウモロコシの種を蒔きつける。それは異様な光景である。その光景を見た語り手は「地面に死を蒔きつけて、もう一度生を生え出させようとしているかのようだった」と語る。この沈黙の儀式ともいえる老夫婦の行為が象徴するものは何なのか。それは、永遠の魂と生まれ変わりを信じる、聖なる思い、死生観ではないだろうか。この作品を読んだ私は、われわれ人間は神秘的な存在であり、われわれの本質は魂である、という強い思いを持つようになった。

本論は「トウモロコシ蒔き」論の前編である。私は、夫婦とともに息子の魂の行方をさがしたい。そのためには文学と死生観を理解する必要があるように思われる。この文学と死生観を理解するために私が選んだのが、ロシアの文豪レフ・トルストイ (1828-1910)

の文学である。なぜならトルストイは、この死生観のテーマを最も深く探究した作家の一人だからである。トルストイ文学は、肉体に宿る生命と心はその肉体の死後、果たしてどうなるのかを、信仰厚き者や唯物無神論者、など様々な登場人物の生き方を通して読者に考えさせてくれる。今回の「トウモロコシ蒔き」論前編は、トルストイのいくつかの作品に描かれた死生観の考察である。この作業は、次回の「トウモロコシ蒔き」論後編で論じるアンダソンの死生観へとつながるものとなる。

トルストイが語らせる軍人の死生観

トルストイが、対ナポレオン戦争(1805-15)を背景に描いた重厚な小説『戦争と平和』(1869)は、人間についての実に多くの学びが詰まった名作である。これは、実在の出来事と人物たちの中で架空の登場人物たちがそれぞれの人生を生きていくという構造の作品である。この物語の中で、私が興味を引かれた箇所の一つに、激しい戦闘を迎える軍人たちが死後の世界について会話をし、さりげない静かな場面描写がある。1805年11月の初旬、ナポレオン軍はウィーンを占領する。ロシア軍は、同盟国オーストリア軍と協力してフランスの大軍と戦う。ロシア軍には、この物語の重要な登場人物の一人であるロシア貴族アンドレイ・ボルクンスキーという青年がいる。アンドレイは部隊の総司令部に属しており、総司令官の副官の一人である。つまり彼はエリート階級の軍人である。バグラチオン公爵(実在の人物、1765-1812)率いるアンドレイたちの部隊は、ウィーンのシェングラーベン村へと向かう。場面の歴史的舞台はシェングラーベン戦である。部隊が村近くに到着するとアンドレイは、戦場全体が見渡せる砲台にのぼる。そこからはロシア軍の配置のほとんど全部と敵の大部分が展望できる。砲台正面の向こう側の丘の地平線には、前線となるシェングラーベン村が見える。その村でこれから、ロシア軍とフランス軍が会戦することになる。双方の、騎兵、歩兵、砲兵ら全兵員が戦うのである。

アンドレイは、総司令官のクトゥーゾフ(実在の人物、1745-1813)のそばに立ち、きたるべき戦闘の成り行きについて考えていた。「もし敵がこう攻めてきたら……しなければならぬ」とか「こうなったら……ああなる、こうする」というように敵勢をどう迎え撃つべきかを、アンドレイは、現実的に、実践的につらつら考えていたのである。このアンドレイの思考は、この世的といえる。私は、アンドレイの軍人としての立場に立つと、この彼の思考は、至極当然であり、正しいと思う。なぜならば彼は、敵軍を破り祖国を守らなければならない、という使命と責任を背負っているからだ。彼には常に、正しい状況判断と決断が求められている。今まさに戦いが始まるとしている。ここは、われわれ読者の緊張感も高まる瞬間である。

しかしこのあとトルストイが描く光景は、読者の意識を別の世界へと導く。それが前述の、軍人たちの会話の場面である。軍人たちは、自分たちにゆめられたそのわずかな時間、「死後の世界」について語るのである。いくぶん長いが、以下がその部分の引用である。

砲兵隊の大砲のそばにいたあいだずっと、彼は、よくあるように、バラックのなかで話している将校たちの声のひびきを、ひっきりなしに耳にしていながら、彼らが話していることが一言もわかっていなかった。ふいにバラックから聞こえる声のひびきが、あまりにも親身な口調で彼を驚かせたので、思わず聞き耳を立てはじめた。

「いや、君」感じのいい、まるでアンドレイになじみ深いような声が言った。「もし死んだあとどうなるかわかったら、おれたちはだれも死ぬのを怖がらないだろうって言うんだよ。そうだろう、君」

別の、もっと若い声がそれをさえぎった。

「いや、怖がろうと、怖がるまいと、どうせ — 避けられっこない」

「でもやっぱり怖いんだよ！なあおい、教養のある諸君」三人目の、男っぽい声が両方をさえぎりながら、言った。「そうなんだよ、君たち砲兵は実に教養があるんだ。なにしろ、なんでも持って来れるからな、ウォッカでも、酒のさかなでも」

そして、歩兵将校らしい、男っぽい声の主は笑った。

「でもやっぱり怖いのだ」最初の聞き覚えのある声が続けた。「わからないこと、これが怖いんだ。魂は天国に行くんだと、いくら言っても……おれたちはちゃんと知っているのだ、天国なんかない、あるのは空気だけだ、って」

また、男っぽい声が砲兵をさえぎった。

「おい、君の草入り酒（ひたしぎけ）をおごってくれたまえ、トゥシン君」彼は言った。

《ああ、あれは飲食屋で長靴をはかずに立っていた例の大尉だ》。アンドレイは哲学談義をしている感じのいい声がだれなのかわかって、うれしい気持ちで思った。

「草入り酒（ひたしぎけ）は飲んでもいいが」トゥシンが言った。「ともかく、来世を理解するのは……」彼はしまいまで言い終わらなかった。

その時、空中でヒュウという音が聞こえた。だんだん近く、だんだん早く、音高く、だんだん音高く、早くなって、砲弾はまるで必要なことを全部言い尽くさなかったかのように、非人間的な力で泥しぶきを飛ばしながら、バラックの近くの地面にぶち当たった。地面が恐ろしい打撃を受けて、あっと叫んだようだった。

その瞬間バラックから真っ先に、横っちょにパイプをくわえて、小柄なトゥシンが飛び出した。人のいい、利口そうな顔は少し青ざめていた。そのあとから男っぽい声の主である、威勢のいい歩兵将校が出てきて、自分の中隊めがけて走り出し、走りながら服のボタンをかけていた。⁽¹⁾

引用文後半の、容赦なく襲い掛かる敵弾の生々しい描写からもわかるように、バラックの中の三人は、現実の死を秒単位で抱えながら、「死後の世界」について、真剣に考えていたのである。その話題で会話がゆるされたのは、せいぜい数分程度と思われる。軍人にとって、戦闘のさなかよりも、戦いを待つ時間のほうが、死の恐怖が強であろう。彼らが酒を飲みたくなるその気持ちは、よく理解できる。と同時に私は、彼らが死後の世界について答えを見出せていないことに、疑問を感じる。彼らは、天国はない、あるのは空気だけ、と思っている。それゆえ彼らは恐怖に怯えているのである。彼らはロシア正教徒もしくはカトリック教徒であり、教会に通い、神や天国について教えを受けているはずなのに、彼らが天国のことを実感できていないのはなぜなのだろうか。もしも熱心なフリーメーソン（自由石工）の会員であったならば、死に対する認識は異なったものになっていたのだろうか。

三人が教会の熱心な信徒であったとは、その口調からは思えない。おそらく彼らは幼い頃から親たちに教会に通わされていたのであろう。そこで彼らは聖職者が説く戒律につい

てさんざん聞かされたのではないか。最後の審判や地獄の話も何度も耳にしていたであろう。しかし聖職者の説教は、彼らに死後の世界を信じさせるほどの説得力がなかったと思われる。教会は彼らに、天国や地獄や死後生のイメージを喚起させることができなかった。彼らは死後生を想像できない。死ねば自分は、何も存在しない空気の中に放りこまれる、もしくはこの自分の魂そのものも消滅する、このような唯物論思考の中、彼らは迫りくる死を怖がっているのではないか。こういう思考を持っていると、人は、仲間や敵の兵士の遺体を目の前にしても、死者の魂が天国にいけることを祈って、十字を切る気持ちにはなれないであろう。

アンドレイの死生観

この時アンドレイは死後について何かを思い描いたのか。トルストイはこの時のアンドレイには、そんなことはさせない。このシェングラーベン戦での勝利のため、アンドレイは敵の砲弾にひるむことなく、うごめき出したフランス兵に果敢に立ち向かって行くしかないからだ。アンドレイたちの部隊は将軍バグラチオン公爵の見事な指揮のもと、シェングラーベン戦に善戦する。アンドレイも活躍する。この戦いを通して、アンドレイが死を意識する場面はない。

ところが物語が進むと、事態は急変する。シェングラーベン戦からおよそ二週間後アンドレイは、チェコ南東部のアウステルリッツの戦いで重傷を負い、ナポレオンの目の前で、フランス軍の捕虜となる。大怪我をしたアンドレイがフランス軍の捕虜となる過程で、アンドレイの死生観が展開されるのである。プラーツ山の上で軍旗の柄を握ったまま倒れたアンドレイは、出血で弱り、子どものように呻きながら横たわっていた。そして日の暮れる頃には人事不省に陥る。彼はどれくらい意識を失っていたのかはわからないが、痛みで目を開ける。すると、上には高い空があり、流れゆく雲の隙間に青々とした無限なるものが見えていた。ひづめの音やフランス語の声が聞こえる。馬に乗って近づいてきたのは、二人の副官にともなわれたナポレオン・ボナパルトであった。戦場には戦死したロシア兵が腹ばいに倒れている。ナポレオンは、仰向けに横たわっているアンドレイを見ながら、「みごとな死にざまだ」と言う。ナポレオンはアンドレイが死んでいると思っている。しかしアンドレイは、このナポレオンの言葉に何も興味を感じなかった。頭が焼けるように痛み、体は出血で弱っていく、そんな中アンドレイは、次のような不思議な感覚を覚えていた。

彼は自分の上にはるかな、高い、永遠の空を見ていた。彼はそれがナポレオンだ — 自分の英雄なのだ、とわかっていて。しかし、自分の心と、この、雲の走っている、高い、無限の空のあいだで今生じていることにくらべると、この時彼には、ナポレオンがあまりにちっぽけな、取るに足らない人間に思えた。だれが自分の真上に立っていようと、何を自分について話していようと、今はまったくどうでもよかった。彼はただ自分の真上に人が立ち止まったことを喜んだ。そして、その人たちが自分を助け、生へと立ち戻らせてくれるのを望んでいた。彼は今では、生をまったく違ったかたちで理解していたので、それが本当にすばらしいものに思えた。彼は身動きをし、何か音を出すために、全力をふりしぼった。かすかに片足を動かし、自分でも衰れを催すような、弱々しい、

苦しそうな呻き声を出した。⁽²⁾

アンドレイは、それまでの人生で、こういう気持ちで空を見つめたことはなかったであろう。彼は、無限なる何かを想像したこともなかったのではないか。アンドレイは敬虔なキリスト教徒ではなかった。彼は、西洋文化を完全に吸収した代表的なロシア貴族の知識人であった。アンドレイは世俗的な名声を求めて唯物的に生きてきた。けれども、死を間近に覚悟した彼にとって、この時に見ている、高く、正しく、善良な空に比べると、この世的な虚栄と勝利の喜びは実にちっぽけなものに思えてきたのである。アンドレイは生きたい、と願う。彼は「生」に、すばらしさを見出していた。この空は、アンドレイの生に対する理解の変化をもたらした。この神秘的な空は、彼に、目に見えない霊的なもの、魂や神の存在を気づかせてくれる象徴として解釈できるのではないか。

アンドレイの首には、敬虔なキリスト教徒である妹マリアが感情を込めて作ってくれた金の鎖のついた聖像がかけられている。アンドレイはその聖像をちらりと見る。その時トルストイは、軍人アンドレイに、死後生というものを意識させる。

《さぞかしいだろうな、なにもかもマリアが感じているように、単純明快だったら。どんなにいいだろうか、どこにこの生を生きる支えを求め、生のあとに、かなたの、墓の向こうに何を覚悟すればいいのかわかったら！どんなにおれは幸福で、安心だろう、今、主よ、我を憐れみたまえ、と言うことができたら！……しかし、それを何者に向かって言うのだ？それは、はっきりしない、とらえがたい、おれが呼びかけることができなばかりか、ことばで言い表すこともできない力 — つまり、偉大なる全または無なのか》彼は心に言った。《それとも、それは、ここに、このお守り袋に、マリアが縫いつけてくれた神なのか？何ひとつ、何ひとつ確実なことはない、おれにわかる、あらゆるもの小ささと、何か不可解だが、このうえもなく重要な、あるものの偉大さ以外！》⁽³⁾

このアンドレイの心境は、バラック小屋で会話していたあの唯物論思考の三人の軍人の心境と共通するものがある。アンドレイは次のように願っているのだろう。死後生が必ずある、ということを確認できれば、人は死を恐れることなく、幸福に安心してこの世の生を生きることができる。偉大な神の存在を信じることができれば、今この時を力強く生きていける。だから天国が存在してほしい。この思いはアンドレイのみならず、誰しも持つことがあるだろう。

負傷して戦場を去り、父の領地に戻ったアンドレイは、友人であるピエールと、死後生の有無、神、真理、善、人間の幸福について語る機会を得る。そこでアンドレイに、唯物論思考から脱する瞬間が訪れたかのように読者には思われる。しかしアンドレイは、その後ほどなくすると、世俗的な欲や悩みに支配されていき、唯物的に生きていく。アンドレイは、死を身近なもの、差し迫ったもの、として考えなくなるのである。

このアンドレイの唯物的な生き方を通して、トルストイはわれわれ読者に何を問いたかったのであろう。ほとんどの人間にとって、死後生の存在を確認し、それを持続して意識するのは、非常に困難なことである、ということトルストイは伝えたかったのではな

いだろうか。

アンドレイが戦場で負傷したのは、1805年である。おそらく敵軍の軍医の手当を受けて、アンドレイはロシア軍に引き渡されたのであろう。この時代の医学で回復できたということは、アンドレイの怪我はそれほど致命的なものではなかった、と推測できる。アンドレイの状態は、臨死体験をするほどのものではなかった。彼が、もしも、臨死体験やそれに近い経験をしていたら、死後生を信じることができるようになり、そのため、死への恐怖も克服できたかもしれない。さらに、人間というものはみな、肉眼では見えない「光」「神」のような霊的な何か大きな力によって生かされている、そういう存在なのである、ということに気づき、新たな死生観、人生観を得て、これまでとは違う生き方を始めたかもしれない。

臨死体験とは死後生を垣間見る体験のことである。これは現代、医学研究の一つになっている。1960年頃から世界の医学的技術が飛躍的に発達し、そのため、それ以前なら助からなかつたであろう負傷者や重病者を蘇生させることができるようになった。その結果、死の淵に立った自分に起きた不思議な現象を語る患者が次々と出てきた。そのような数多くの患者の膨大な証言を医学的見地から丹念に検証したのが、臨死体験研究の第一人者、アメリカの精神科医レイモンド・M・ムーディ博士(1944-)とエリザベス・キューブラー・ロス博士(1926-2004)である。臨死体験は、必ずしも、怪我や病気で心肺一時停止、長時間の昏睡状態に陥ったすべての人に起こることではない。しかし体験者の証言の内容には個人差はあるものの、その鮮明な記憶には、ある一定の特徴があるということが明らかにされている。レイモンド・ムーディ著(笠原敏雄/河口慶子訳)『光の彼方に— 死後の世界を垣間みた人々』⁽⁴⁾によると、臨死体験では、たとえば、肉体を抜け出した自分が空中を漂いつつ自分の肉体を見下ろしている、とか、安らぎを得て苦痛から解放された、とか、光を見た、一生を振り返る、この世に戻りたくないと思うほど心地よく幸福に満ちた状態であった、などのことがあるようだ。このような神秘的体験を経て蘇生した後は、人生観が大きく変わったケースも多い。死に対する不安がなくなったこと、愛の大切さに気づいた、宇宙に存在するものはすべてつながっているという感じを抱く、学びの大切さを認識した、与えられた残りの人生を前向きに責任感を持って生きなくなった、などが共通した証言としてある。

アンドレイが唯物論思考から脱却できる道は、ほかにあるのか。アンドレイが臨死体験をしないで、死後生を認識し、自分がこの世に生まれてきた意味を理解し、人間の魂の永遠性を信じて生きていくには、妹マリアのように、深い信仰心を得る必要がある、といえる。アンドレイが戦場において、もしもそのような信仰の境地にいたならば、戦死したロシア兵のその遺体に向かって、彼はその魂の救済を祈り、十字を切ったのではないか。

中央裁判所の判事イワン・イリッチ四十五歳の死

『戦争と平和』を1869年に発表したトルストイは、その十数年後の1884-6年に『イワン・イリッチの死』を執筆する。物語の主人公である判事イワン・イリッチは1882年2月4日に四十五歳で亡くなった。イワン・イリッチは、その数ヶ月前に、自宅の壁紙を張り替えるためハシゴの上へ昇ったが、足を踏み外して彼は下に落ち、その時に窓の取っ手に横腹を軽くぶつけてしまった。痛みは間もなくすると治まったので、イワン・イリッチ

はただの打ち身だと思い、ほっておいた。だが、それは彼の内臓をひどく損傷させていたのである。痛みが激しくなりイワン・イリッチは医者に診てもらおうが、痛みの原因がよくわからない医者は適切な治療ができない。イワン・イリッチは三ヶ月痛みで苦しみ、死ぬ。このように筋としては単純であるが、われわれはこの作品から、典型的な唯物論者、無神論者である男の死生観を見ることができる。

病気で幾週間か休職中、イワン・イリッチの判事としての椅子は保留されていた。イワン・イリッチは裁判所の同僚たちに好かれているほうだった。けれども、イワン・イリッチの死が葬儀で集まった同僚たちに与えたのは、深い悲しみではなく、その死が彼らの役職にもたらす影響、誰がその後任となり、そのまた後任には誰が任命されるか、といったように昇任、転任、異動、昇給についての関心であった。同僚たちにとってイワン・イリッチの死は、取りも直さず自分の栄転と増給の可能性を意味していた。彼らは冷酷な仕事仲間に見えるが、もしもイワン・イリッチが彼らと同じ立場にいたら、彼もまた同様に、上役の死によって得られるであろう、自分の出世を計算したであろう。

葬儀の場面を通して、弔問客や未亡人となったイワン・イリッチの妻や遺族の様子が事細かに描写される。その後、イワン・イリッチの過去の歴史が丁寧に描かれる。イワン・イリッチは官吏の息子として生まれた。父親は上手に栄達の途を開いた人物で、長男は父と同じように栄達の途を重ねた。三男の弟は失敗者であった。次男であるイワン・イリッチは、長男ほど冷たく杓子定規の人間でもなければ三男ほど無鉄砲でもない、その真ん中をとって、利口に立ちまわり、礼儀正しく生き、法律学校を優秀な成績で卒業した。卒業後は、地方に赴き、父親の紹介で、県知事つきの特務官という位置につく。イワン・イリッチは栄達を願いつつ、愉快にかつ世間体の悪くないように遊ぶ。彼は上役に対しても下役に対しても威厳を失わないように対応し、抜かりなく仕事をこなす。上官の妻に思いを寄せられて、不倫関係になることもあったが、ばれることはなかった。人づき合いが上手な彼は上流社会の中で信頼を得る。そして五年後には他県の予審判事に出世していく。新しい土地では、反知事的傾向の人たちとも良好な人間関係を築き、被告や証人に対して彼は自分の権力を乱用せず、抑制的に堅実に職務を遂行した。生活は安定し、すべてが順調であった。

ここまでの叙事的な流れをみれば、イワン・イリッチは、人格者とはいえないが、さほど嫌な人ではない。特段に優れた点はないが、すべてにおいてそつがない人物といえよう。しかし、それから二年後、プラスコーヴィヤ・フォードロヴナと結婚し、その二十年間の夫婦生活を通して明らかにされていくイワン・イリッチの人間性は、愛される人物のそれではない。イワン・イリッチは信仰心がほとんどなく、この世的な執着心が強く、家族への思いやりに欠けている。そのうえ、自己中心的で、とくに晩年は怒りっぽく、ひねくれた性格になっている。

プラスコーヴィヤ・フォードロヴナと交際したのも、予備判事の労務をまぎらわす娯楽の一つにすぎなかった。魅力的な女性、プラスコーヴィヤ・フォードロヴナは、イワン・イリッチにとって、ちょうど良い遊び相手のつもりであった。ここにも、イワン・イリッチの打算的な面が表れている。関係を結んだプラスコーヴィヤ・フォードロヴナはイワン・イリッチに恋するようになり、家柄も良く綺麗な娘ということで彼は彼女を妻にする。イワン・イリッチはプラスコーヴィヤ・フォードロヴナに財産があると思っていたが

実際にはそうではなかった。

貪瞋痴の末

仏教に、貪瞋痴(とんじんち)という言葉がある。貪(とん)は、「むさぼり」、瞋(じん)は「怒り」、痴(ち)は「無知と愚痴」のことであり、これを心の三毒ともいう。痴が意味する無知とは、真理を知らない、知ろうともしない、ことでもある。真理とは、死後生があるという事実を指す。したがって、痴とはあの世を信じない唯物論思考のことでもある。もっといえば、この真理は次のことである。人間は死後あの世に行くが、あの世にはいくつも段階がある。その魂にふさわしい段階がその魂の行き先である。それはその人間の生前の思いと生き方によって決定される。たとえば、目には見えない聖なるものを信じて、利他の精神で、誠実で勤勉に人生を歩んできた人の魂は、より高次元に行く。この魂のことを高次元魂もしくは高級霊という。荒れた人生を送ってきた人の魂は地獄に行く。

イワン・イリッチはまさに、この三毒に侵されていた人物であることがわかる。彼は社会的には不誠実ではなかったが、謙虚さを忘れてしまい、あの世も信じていなかった。

結婚生活は喧嘩の連続である。プラスコーヴィヤ・フォードロヴナは嫉妬深く口やかましい性格であった。彼女もまた心の三毒に蝕まれていた。夫が彼女の要求を聞き入れないと彼女は口汚く夫を罵りはじめた。不満だらけの不和の絶えない家庭である。この二人が幸せを築けないのは、互いに自己愛が強く、自己に都合の良い暮らしを求めただけで、感謝心や利他の精神を知らないからである。結婚から三年後にイワン・イリッチは検事補に昇進する。この任務は、以前よりも重大な性質と権力を持ち、法廷の論告で成功すると注目されるため、イワン・イリッチは家庭よりも勤務へ情熱を向けるようになる。その後、他県へ検事として栄転する。子どもは次々と生まれるが、妻はいっそう口やかましく怒りっぽい女になる。結婚十数年で子どもは五人誕生するが、うち三人が幼くして死んでしまう。その事実の記述の際にトルストイは、イワン・イリッチと妻の表情やしぐさに悲しみの情を帯びさせない。その文章からは、授かったかけがえのない幼き命のいとおしさ、それを失った時の計り知れない切なさ、というぬくもりや潤いのようなものが全く読み取れない。そこには「愛別離苦」が感じられないのである。夫婦生活に初めて平和が訪れたのは、イワン・イリッチが横腹をぶつける少し前、彼が二級昇進し、年俸も増給した時だった。この夫婦の幸せは、双方の利害、この世的な目的がぴったり一致することでしか成り立たないのである。

けれども夫婦生活の調和は、イワン・イリッチの健康悪化によって、もろくも崩れる。体調が悪いとイワン・イリッチは機嫌が悪くなり、妻は、そういう夫をいたわることはなく、これまでの自分の言動を反省することもなく、夫を責めたてる。イワン・イリッチは妻を憎悪する。夫婦の諍いは激しさを増していく。イワン・イリッチは、もうすぐ嫁入りをする娘、一生懸命に勉強を頑張っている中学生の息子、たちのちょっとした態度にまで八つ当たりをするようになる。妻は自分自身を憐れみ、夫の死を願うが、それで俸給が入らなくなることを考えると、自分を不幸に感じ、いらいらしながらもその感情を隠す。その様子を見ているイワン・イリッチは痼癪をつのらす。イワン・イリッチは、家族の誰かに、目の前の誰かに、優しい愛のある言葉、感謝の言葉を掛けることがない。彼は、その

一言の大切さを知らないのだ。

このような人格のイワン・イリッチは、自分の死をどのように受け止めようとするのか。体が言うことを聞かなくなった彼は、病床で、恐怖の中こう思う。「おれがいなくなると、その時はいったいどうなるんだろうか？なんにもありゃしない。おれがいなくなった時、いったいおれはどこへ行くんだろう？本当に死ぬんだろうか？いやだ、死にたくない。」⁽⁵⁾ このあと、イワン・イリッチは周囲の人間を呪う。誰一人この自分のことを気の毒に思ってくれない、みんな平気で楽しそうにいる、と彼は憎悪の念で息がつまりそうになる。もちろん程度の差はあれ、人は誰しも、自分の死期が現実的になると、恐ろしくなり動揺するであろう。冷静にその事実を受け止め、落ち着いた態度でいられる人は、そうはいないであろう。しかし、それにしてもイワン・イリッチの負の感情は、あまりにも激しく異常である。イワン・イリッチは自分に与えられた命、愛、死との向き合い方を全く知らない。彼は無知である。その理由は彼の人間性にある、と私は考える。イワン・イリッチは、自分に与えられた幸運はすべて自分のおかげで当然のことと思い、自分に降りかかる不幸や災難はすべて誰かのせいである、と決めつける、そういう身勝手な人間だからである。イワン・イリッチがもしも、自分の命も、愛の感情も、寿命も何もかも、神によって与えられたものである、というふうに理解していたら彼の生き方そのものがおのずと違ったものになっていただろう。彼はもっと人に優しくなれたであろうし、自分の死の捉え方も全く異なったものになっていただろう。これはなにもイワン・イリッチに限った話ではない。われわれすべての人間に言えることでもある。本来人間の死は神によって定められたものである、と信じる事ができれば、われわれは自分の死を意識して、日々与えられているその生を生きることができる。したがってわれわれは他者のことを大事にし、その命も粗末にしなくなるであろう。

イワン・イリッチは、孤独と絶望の中、神の残酷さを思い、神は存在しないと思い、泣く。これは何の罰なのか、と神に問う。イワン・イリッチは生きる意味がわからなくなっていた。「人生がこんなに無意味で、こんなに穢らわしいものだななんて、そんな事のあろうはずはない！よし人生が真実にこれほど穢らわしい、無意味なものであるにせよ、いったいなぜ死ななければならぬのだ？なぜ苦しみながら死ななければならぬのだ？なにか間違ったところがあるに違いない。」⁽⁶⁾ イワン・イリッチのこの問いには、唯物論者の嘆きと怒りが込められている。われわれは、そこから、次のことを知ることができる。この世的な自分の成功を生涯の一番の目的にし、自分の野望、欲望を果たすことのみを価値を置き、それに執着してきた、「貪」を抱えた人間が、その道半ばで突然、死の現実を突きつけられた場合、その人物は、「痴」ゆえにきっこう思うであろう。人間の生死は謎だらけでそこには何の意味も教えも理由もない。人生はただ偶然の連続で、運命のきまぐれの結果にすぎないもの、因果応報もない、神や神意や神の秩序などは存在しない、それがすべてである、と。

神は、いるとしても残酷な存在で、そのせいで自分の人生は無意味なものである、と落胆しているイワン・イリッチだが、最後に、儀式的に神を受け入れる。妻が自分自身のため、自分の苦しみから救われたいために、自宅に呼んだ聖職者によって、病床のイワン・イリッチに聖餐式が執り行われた時である。治療の一つと思って懺悔の式を受けているイワン・イリッチは、気分がやわらぎ、なんとなく疑惑が軽くなり、苦しみが薄らいだよう

に思われた。一瞬だけ希望を感じ、涙を浮かべた。気分が軽くなった彼は、手術のことを考えて、「生きたい」と願った。けれども、妻の姿を見た瞬間、たちまち、憎悪の念すなわち「瞋」と肉体の苦痛に苛まれるのである。衰弱した体で彼は、妻に悪態をつく。悪態は「痴」が意味する「愚痴」のことである。

それから三日間、イワン・イリッチの病状は急激に悪化する。瀕死の彼は自暴自棄に泣き叫ぶ。けれども息を引き取る直前に、彼は何か穴の中に落ち込んで、一点の光明を認める。「そうだ、おれはこの人たちを苦しめている」ということに彼は気づき、「可哀そうだ、しかし、おれが死んだら、みんな楽になるんだ」と考える。だが、これまでの自分の生活は間違っていたと反省はするものの、イワン・イリッチはそれ以上の深い真理を悟るには至らず、力尽きる。そしてこの作品は、次のように、イワン・イリッチの臨終の模様を伝える形で、結末を迎える。

すると、とつぜん、はっきりわかった — 今まで彼を悩まして、彼の体から出て行くとしなかったものが、一時にすっかり出て行くのであった。四方八方、ありとあらゆる方角から。妻子が可哀そうだ、彼らを苦しめないようにしなければならない。彼らをおの苦痛から救って、自分ものがねばならない。『なんていい気持ちだ、そして、なんという造作のないことだ』と彼は考えた。『痛みは?』と自問した。『いったいどこへ行ったのだ? おい、苦痛、お前はどこにいるのだ?』

彼は耳をすましはじめた。

『そうだ、ここにいるのだ。なに、かまやしない。勝手にするがいい。』

『ところで死は? どこにいるのだ?』

古くから馴染みになっている死の恐怖をさがしたが、見つからなかった。いったいどこにいるのだ? 死とはなんだ? 恐怖はまるでなかった。なぜなら、死がなかったからである。

死の代わりに光があった。

「ああ、そうだったのか!」彼は声をたてて言った。「なんという喜びだろう!」

これらはすべて彼にとって、ほんの一瞬の出来事であったが、この一瞬間の意味はもはや変わることがなかった。しかし、そばにいる人にとっては、彼の臨終の苦悶はなお二時間つづいた。彼の胸の中でなにかことごとく鳴った。衰えきった体がぴくぴくとふるえた。やがて、そのことごとく鳴る音もしわがれた呼吸も、しだいに間遠になって行った。

「いよいよお終いだ!」誰かが頭の上で言った。

彼はこの言葉を聞いて、それを心の中で繰り返した。『もう死はおしまいだ』と彼は自分で自分に言い聞かせた。『もう死はなくなったのだ。』

彼は息を吸いこんだが、それも途中で消えて、ぐっと身を伸ばしたかと思うと、そのまま死んでしまった。⁽⁷⁾

イワン・イリッチの最期の瞬間は安らかであった。「貪」と「瞋」はやっと消えていた。だが、残念ながら彼は、三毒から完全に解放されたわけではなかった。彼は「痴」である唯物論思考のまま亡くなってしまった。彼は、最期まで信仰心を持つことができなかつたし、自分がこの世に生を受けた意味も学べなかつた。彼は魂の修行と成長を拒んだ。魂の

存在すら認めようとしなかった。彼は「人を愛すること」「人を生かすこと」「人を許すこと」が人間にとってどんなに大切なことかを深く理解することができずに、逝ったのである。それゆえトルストイは、霊格の高くない「痴」イワン・イリッチの死後生を描かなかった、いや、強い違和感から描く気になれなかったのだ。信仰心の強いトルストイにとって、イワン・イリッチの死後生と神秘的な世界はどうしても結びつかない。結びつけるのは、作家としてあまりにも不自然なことであり、その結果、読者への説得力に欠けることになるからである。

神や仏を心から正しく信じる信仰心の深い人間と、イワン・イリッチのような唯物無神論の人間の、日々の生き方に見られる根本的な違いは何か。前者は、自分の行いや心の内は、すべて天の神や仏に見られていると信じて、神や仏に恥じない生き方をする。後者は、神や仏は存在しないし、自分の行動は見られていない、と考える。もちろん、自分で無神論者と言っている、日本人がよく言う「お天道様は見ている」という精神を持ち、自分の心に恥ずかしくないように、善行を心掛ける道徳的な人もいる。このような人は「痴」ではない。なぜならその人は潜在意識において、良心、人情、倫理を重んじており、目には見えない聖なるものを信じているからである。その人は、法律だけではなく、良心の痛みに基づいて、善悪の判断をする。この良心の痛みとは、宗教的という、人間に本来備わっている「神性」「仏性」のことである。

完全なる唯物無神論者、「痴」の人は、ときに、善悪の判断がわからなくなってしまう危険性がある。そして、ずるいことをしてもバレなければいい、何をやってもかまわない、という思考に陥ってしまうと、悪事に手を染めることもある。彼らは、自分だけよければよい、と平気で思える人たちである。彼らがそうできる理由は、彼らは、神などといった目に見えない霊的なものは存在しない、神の裁きなどはありえない、人生はこの世限りのもの、人間はみな死んだら無になる、あの世などというものは無い、そもそも魂はない、感情というものは、すべて脳の働きである、と考えているからである。このような人は唯脳論者ともいわれる。彼らは、人間が本来持って生まれてきたはずの「神性」「仏性」に、「痴」や様々な悪想念が重なって、ほこりがついてしまった人たちなのである。

イワン・イリッチは、法を犯す人間では決してなかった。彼は判事であり、法を犯した人を裁く側の人間だった。彼にとって善悪の基準はすべて法であったのだろう。しかし彼はこの世的な執着心が強く、慈悲の心が乏しく人間的な滋味にも欠ける生き方をしてきた。誰かにわずかでも無償の愛を捧げたことなどない人間であった。もしも、死ぬ前に、ほんの短い期間でもいいから、ささくれた心のイワン・イリッチの死生観、人生観に変化が生じて、ほかの誰かに純粋な気持ちで愛を与えるということをしていたら、具体的にそのような行動ができていたなら、死後に彼は導きの光に迎えられたであろう。イワン・イリッチの魂は、痴でほこりまみれになっていたが、彼が反省と感謝と他者への思いやりの大切さに目覚めそれを行動に移す努力をすることで、その魂を磨き、汚れをきれいに落としてくれていたら、どんなによかったであろう。なぜならば、そのように、利他に生きた人の魂を、キリスト教という天使あるいは仏教という菩薩が導きの光となって、迎えにきてくれるからである。

トルストイが描く光の世界 — 「人はなんで生きるか」と「老人」

ここで、「イワン・イリッチの死」とは対照的といえる、美しい輝きを放つ清らかな魂の持ち主が登場する、トルストイの短編小説のうち、二編について論じてみたい。一つは、1881年頃に執筆した「人はなんで生きるか」、もう一つは、1885年執筆発表の「老人」である。この二作品は、光に満ち溢れた神秘の物語である。

「人はなんで生きるか」は、腕は良いが、お人よしの性格のせいで貧しい生活を強いられている靴職人セミョーンを主人公にした作品である。このセミョーンは心から神を信じている。妻のマトリョーナも信仰心を持っているものの、夫セミョーンへの不平不満が溜まり、夫をがみがみ叱りつけてばかりいる。マトリョーナの立場に立つと、彼女に同情することもできる。なぜならば、セミョーンは、いくら良い靴を仕上げて客に提供しても、客である百姓に言いくるめられてなかなか靴代をもらえないからである。そのため、一家は満足に小麦も買えず、幼いわが子に食べさせる明日のパンにも事欠く暮らしを続けているからである。セミョーンとマトリョーナは、一着の外套を共有で使うほど貧しい。マトリョーナは、儉約しながら、コツコツお金をためていた。マトリョーナはそのお金に、百姓から受け取る代金を足して、もう一着外套を作るための羊の毛皮をセミョーンに買ってきてほしかった。それでその日、セミョーンはマトリョーナの使いで百姓たちの家に集金に出かけた。だが、金がないからあとで払うと言う者、代金のほんの一部しか払ってくれない者、そういう不誠実な人たちにセミョーンは、適当にあしらわれてしまうのだ。皮を買うには手持ちの少ないセミョーンに、皮屋は商品を掛け売りしてはくれず、やけになったセミョーンは、百姓からもらった小銭で酒を飲んでしまう始末である。

そのようなセミョーンは、この時点では、読み手の目には、単なるお人よしの気楽な人間にしか映らない。セミョーンは、家族の生活に対する責任感の薄い、凡庸な人物にすぎないのである。その寒い夜、セミョーンは酒に酔ってぶつぶつ文句を言いながら、家路を歩いていた。セミョーンは、道の曲がり角にある礼拝堂のそばまで来た。その礼拝堂のうしろに白いものがある。よく見ると、礼拝堂の壁にもたれたまま、身動きもしないで、若い男が素っ裸で座っているのだった。セミョーンは気味が悪くなり、物騒なことに巻き込まれたくない、という恐怖心から、その場を通り過ぎて、礼拝堂の角を曲がった。男の姿はセミョーンの視界から見えなくなったが、何か男に見られているような気がして、セミョーンはなおさら怖くなった。人通りのない夜道は危険なので、セミョーンがその場から急いで逃げたことは、誰も非難することはできないであろう。

ところがセミョーンは足早に逃げながらも、もう一度あの男のそばに行ってみようか、それともこのまま行ってしまおうか、と悩む。近づいてひどい目に会ったらどうしよう、だけど、ほっておくのは良心がとがめる。すると次の場面で、われわれは、不思議な光が差し込んできたセミョーンの心の空間に導かれる。

彼は道のまん中に立ち止まった。

「おまえはいったいどうしたというのだ、セミョーン？」彼は自分に言うのだった。「ひとが災難にあって死にかけているのに、おまえはこわがって、見て見ぬふりをしようとしている。それともおまえは、それほどたいした金持ちにでもなったというのか？持っているものがとられるのがそんなにこわいのか？おい、セミョーン、よくねえだ

ぞ!」

セミヨーンは踵をかえして、その男のほうへ戻って行った。⁽⁸⁾

セミヨーンのこの行動は、強い信仰心と愛と勇気がないとできることではない。セミヨーンは自分の外套を脱いで、それを着よう、そして、その日ある百姓から修理のために預かったフェルト靴を履くよう、その若い男に声をかける。セミヨーンは、無言で立ち上がった男のすらりとしたきれいな体と傷一つついていない手足と優しくかわいらしい顔を見た。どこの土地の者なのか、なんでここに来たのか、とセミヨーンが聞いても男は、自分は神様に罰せられた、としか答えない。セミヨーンはそれ以上余計なせんさくをするのをやめて、自分の家にその男を連れて帰るのである。私は、この二人の歩く夜道を想像してみた。それは、聖なるあたたかい光に照らされた美しい真っすぐな道である。

家ではマトリョーナは、セミヨーンがちゃんと毛皮を買ってくるのかを心配しながらその帰りを待っている。小麦もわずかしか残っていないから、パンも少ししか作れない。ここにも、人間の善性が試される場が用意されている。

マトリョーナは、セミヨーンが毛皮を買ってこなかったこと、百姓から受け取ったお金で酒を飲んできたこと、そのうえ、得体の知れない裸の男まで連れてきたこと、その男が自分たちの外套を着ていること、セミヨーンが男にも晩御飯を食べさせてくれと要求したこと、に激怒する。男を連れて帰ってきた事情をセミヨーンは説明しようとするが、マトリョーナはセミヨーンに口を利かせず、一方的にこれまでの不満を十年前のことまで洗いざらいまくし立てる。怒りの「瞋」と愚痴の「痴」に支配されてしまった恐ろしい形相のマトリョーナはいまにも、その見知らぬ旅人を追い返えす勢いである。その旅人の青年は、その間身動きもしないで、目を開かないで、何かに息を止められているように苦しうにしかめつらをしている。マトリョーナが激しい剣幕で怒りの言葉「瞋」「痴」を吐き出したあと、セミヨーンはやっと、この男を連れてきた経緯を話すことができた。そして、怒りをこらえながら黙っているマトリョーナにセミヨーンは「マトリョーナ、おまえの心にや、神さまはいなさらねえのかい?!」⁽⁹⁾と言った。このセミヨーンの一言は、光の結晶ともいえる言霊である。

この言霊は、この地上でわれわれが、神の光を受けた人間として生きていく資格を持つのか、それとも無明の闇の中、獣同然にただ寿命を費やしていくだけの生きものになるのか、そのどちらかを決める、われわれの本質を問うものである。

神とはロシア正教会の神のことだけを指すのではない。人間の中に本来ある崇高な精神、「神性」「仏性」のことである。加えて言うと、セミヨーンの口から出たこの言霊は、人間の潜在意識に眠る「守護霊」や「指導霊」の「声」とも呼ばれる「インスピレーション」を呼び覚ますものである。さらに人は悟りが深まると、死後にも自分の魂が永遠に生き続けることと、その魂のふるさとである天上界が存在することを確信できるようになる。これは、死の恐怖を克服するために、アンドレイが希求したことである。

マトリョーナは、セミヨーンのこの言霊に反応し、自分の善性、人間性を取り戻す。マトリョーナの怒り「瞋」は消え、彼女はその青年に食事を与える。それだけではない。マトリョーナは、パンを食べるその青年に対して憐れみを感じ、彼を愛する気持ちになった。このマトリョーナの人間性の回復をトルストイは祝福するかのよう、こう描く。「急に

旅人は元気がよくなり、しかめつらするのをやめて、マトリョーナのほうへ目を上げると、にっこり笑った。』⁽¹⁰⁾のちにわれわれは、青年のこの笑顔に深い理由が隠されていたのを知ることになる。

食事が終わると、マトリョーナは、青年の素性を聞き、道端に裸で倒れていた理由を訊ねるが、青年は神の罰を受けたため、と答える。続けて青年は、セミョーンが、裸で凍えていたこの自分に外套を着せ、この家に連れてきてくれて、そしてこの家で自分にマトリョーナは食べさせたり、飲ませたりして、憐れんでくれた、と説明しその情けに対して感謝の気持ちを述べ、神はあなた方二人を助けてくれるであろう、と最後言葉を締めくくる。マトリョーナは青年にそれ以上質問をするのはやめて、その青年に服と寝床を提供する。マトリョーナは今後の生活をあれこれ心配しながらも就寝する。この信心深い二人は、自分たちの生活が苦しいにもかかわらず、困っている人に無償の愛を与えた。イワン・イリッチに欠けていたのが、まさにこの利他、慈悲の心と行為である。それゆえにイワン・イリッチは、死の恐怖を克服できなかった、といえる。

翌朝、セミョーンは青年に名前を聞く。青年の名前はミハイルという。セミョーンはミハイルに靴の作り方を教える。ミハイルは仕事をすぐに覚え、休むことなく黙々と働く。ミハイルは小食で、よけいな口を利かず、笑いもしない。ミハイルが笑顔を見せたのは、マトリョーナが最初に晩飯をふるまった時だけであった。われわれは、謎の多いこのミハイルに引き込まれていく。一年経って、ミハイルは相変わらずセミョーンの家に住み込みで働いていた。腕の良い靴職人となったミハイルの評判はとても高く、靴の注文がたくさんくるようになり、そのおかげでセミョーンの収入も増えた。われわれはこのあと、二つの出来事とそれとともなうミハイルの笑顔に出会うことになる。

ある冬の日のことである。セミョーンとミハイルが座って仕事をしていると、三頭引きの橇が小屋の前に止まった。若い御者が橇のドアを開けると、中から出てきたのは毛皮外套にくるまった大男だった。その大男の旦那はセミョーンの家である小屋に向かって歩いてきた。マトリョーナがドアを開けると、体を前かがみにしてその旦那は入ってきた。この旦那は、いわば「貪瞋痴」の塊のような人間だった。

この金持ちの旦那はセミョーンに向かって、大声で威圧的に用件を述べる。旦那は上等なドイツ製の靴皮を持参してきた。この二十ルーブルもする高価な皮で、自分の足に合う長靴が作れるか。条件は自分が一年履いても形の崩れない、縫い目の切れない長靴を作ること。もしも一年経たぬうちに縫い目が切れたり形が崩れたりしたら、セミョーンを牢屋にぶちこんでやる。そのかわり、一年経っても切れもせず形も崩れなかったら、工賃として十ルーブルを払ってやる。この注文を断るか、引き受けるか、どっちだ、と。この怖い注文を受けて、セミョーンはミハイルに相談する。ミハイルは、引き受けなさい、という意味で、うなずいた。そのあと、セミョーンは旦那の巨大な足の寸法をとった。旦那は終始、乱暴な物言い、態度で命令をする。この威張った客は、ミハイルが自分の靴を作る職人であることを知ると、気をつけて丈夫な靴を作れよ、と脅すように念を押す。このように男は、悪事を働くことはないにせよ、高価なものを求めるむさぼりの「貪」と、失敗したら承知しないぞという怒りの「瞋」、相手が自分よりも貧しく身分が低ければ蔑んでかまわないと思っていることや、帰り際の口汚い罵りの言葉、さらに、信仰心の欠片も見られない精神、これら無知と愚痴の「痴」、この心の三毒の総合体、象徴のような人間である。

旦那がミハイルに命令したあとの、以下の二人の短いやりとりは非常に興味深い。

セミョーンもミハイルのほうを振り返って、見ると—ミハイルは旦那のほうを見ないで、旦那のうしろの一隅にきつと目を据えていた、まるでだれかを見つめてでもいるように。ミハイルはいつまでもじっと見ていた、が、急に—にっこり顔をほころばせると、からだぜんたいがぱっと明るくなって見えた。

「このほか、何をにやにや笑ってやがるんだ？ それよりきさま、期日どおりまちがいなく、靴をつくるように気をつけろ」

そこでミハイルは言った —

「ご入用の時までには、必ずお間に合わせいたします」

「よし」

旦那は長靴をはき、毛皮外套をつけ、すっかり身を包んでから、戸口のほうへ行った。が、身をかがめることを忘れたので、いやというほど鴨居に頭をぶっつけた。

旦那は口ぎたなく罵って、頭をさすりながら、箱櫓に乗ると行ってしまった。⁽¹¹⁾

この時ミハイルは、なぜ微笑んだのか。この謎は、あとで明かされる。暴君のような旦那が立ち去ったあと、セミョーンとマトリョーナは怯えながらこんなふうにつぶやく。なんておっかない人だ。大槌でぶたれても死にそうにない人だ。あんなでかい人には死神も歯が立たない、と。夫婦にとって、その旦那は死とは無縁の生き物にしか見えないのであろう。セミョーンの小屋を出て行く、その旦那の後ろ姿を私は、思い描いてみた。そこから浮かび上がるのはこれまでのその男の生き方であった。その男は、いまこの瞬間まで、自分の富と権力に物を言わせ、なんでも自分の思い通りに生きてきたはずだ。なんでも自分の意のままにできるという自惚れ、傲慢さ、自分の野望を阻むものは絶対にゆるさないという不寛容な精神、この男はそれだけでできている人間である。

翌日ミハイルは、さっそく、旦那の靴を作る作業にとりかかる。セミョーンは、旦那が怖いので、旦那の注文通り、失敗しないようにやってくれ、と心配そうにミハイルに言う。ところがミハイルは、そんなことなんかおかまいなしに、さっさと皮を切ってしまい、スリッパを縫うように、縫い始めた。仕上がったのは、長靴ではなく、一足のスリッパである。それを見たセミョーンは、これは大変なことになった、と動揺するが、その時誰かが馬に乗ってやってきた。その来訪者は、あの旦那の御者をつとめていた若い下男だった。下男によると、旦那にはもう長靴は不用になった、なぜなら、旦那はここを出てすぐに櫓の中で死んでしまったからだ。家に着いたらそのことがわかった。それで奥さんは、あの皮で、長靴ではなく、死人に履かせるスリッパを大急ぎで作ってもらおうよう、自分をここに使いによこした、ということだった。下男がそう言い終わると、ミハイルはテーブルの上に置いてあった、スリッパをその下男に手渡した。

どうしてミハイルは、旦那がすぐに死ぬ運命であることを知っていたのか。われわれにはそのことが不思議でならない。それから時が経ち、ミハイルはもう、セミョーンのところにきてから六年目を迎えた。彼は、それまでの五年間、どこへも出ず、ほとんどしゃべらず、笑顔を見せたのは、マトリョーナがミハイルに夕飯を食べさせた時、あの旦那が来た時、そのたった二度だけである。しかし、セミョーンはこの職人ミハイルのことが心か

ら嬉しかった。ミハイルがどこかへ行ってしまわなければいい、と心配していた。ミハイルは、われわれ読者にとっても愛おしい存在になっていた。ミハイルはやわらかい光を帯びているように思われる。一緒にいるセミヨーンは常にその愛の光に触れ、そしてその光はセミヨーンを通して、われわれ読者の目に届けられるのである。

ミハイルの最後の笑顔と別れの時

一人のこざっぱりした身なりの女性が幼い二人の女の子を連れて、セミヨーンを訪ねてきた。一人の女の子は左足を引きずって歩いていた。女性の用件は、この双子の娘のために靴を作ってほしい、ということである。曲がっている足のほうで片足、真っすぐな足用に一足半をお願いしたいという。セミヨーンは二人の足の寸法をはかりながら、足が悪いのは生まれつきなのか、と聞いた。すると、これは母親が押し曲げたせいだと答える。女性は事情を語り始める。女性の名前はマリアで、彼女は二人の生みの母ではない、という。六年前のことである。この子たちは、一週間で孤児になってしまった。父親は百姓をしていたが、森の中、伐った木が倒れてきて、圧死した。その三日後にこの子たちが生まれ、母親は一日しか生きていなかった。この子たちの母親も父親も身寄りがなかった。マリアは隣に住んでいたので、母親の見舞に行き、小屋の中に入ると、母親は死んでいた。その女性は一人で子どもを生んで、一人で死んだことがわかった。死ぬときに母親は一人の子の上に覆いかぶさったため、その子の片足を押しまげてしまった。マリアには、当時、生まれて八週になる男の子がいた。近所の親切な百姓たちが、孤児になったこの双子を、マリアに当分預かってほしい、と頼みにきた。そのうちに何とか考える、ということで、マリアは双子を預かり、実子を含めて三人に母乳をあげた。わが子は二歳で亡くなり、神様はその後マリアに子どもを授けてはくれなかった。マリアはその双子を実の子と変わらぬ愛情で育てた。財産も増えて暮らしは楽になったが、子どもはいない。もしもこの子たちがいなければ、どうして暮らしていけるだろうか。この二人がかわいい。マリアにとって、この双子は生きる支えになっていた。マリアは涙を流しながら足の悪い子を抱きしめる。話を聞いたマトリョーナはため息をついて、「『親はなくとも子はそだつ、が、神がなくては生きてゆけぬ』』ということを言いますが、ほんによく言ったものでございますね」⁽¹²⁾と言った。この時私には、セミヨーンとマトリョーナ、マリア、この三人の清らかな信仰心が一つの光の輪を作り出しているように感じられる。その輪はどんどん広がっていくようだ。そしてその輪は、次の場面に自然に結びつく。

こうして彼らはしばらく話し合った — 女のひとが暇を告げて立ち上がると、主人たちはそれを送って出て、ふとミハイルのほうを見た。と、彼は、膝の上に腕を組んで腰かけたまま、上のほうを見ながらひとりでにこにこ笑っていた。⁽¹³⁾

ミハイルによると、神様はミハイルをゆるしてくれた、ということである。ミハイルは後光がさしている。セミヨーンには、ミハイルとの別れの時がきたことがわかった。しかし、セミヨーンにはどうしても知りたいことがある。なぜ、セミヨーンがミハイルをここに連れてきた時は浮かぬ顔をしていたのに、マトリョーナが晩飯をあげた時には、マトリョーナに向かってにこにこ笑い、明るい顔つきになったのか。それから、旦那が長靴を

注文した時に二度目の笑顔を見せて、明るい顔つきになったのか。それからマリアが娘を連れてきた時に、三度目の笑い顔をして、体全体が光り輝くようになったのか、どうしてなのか、教えてほしい、ということである。ミハイルはこう答える。ミハイルから光が出るのは、ミハイルがこれまで受けてきた罰を、いま神様が許してくれたからである。自分が三度笑ったのは、神様の三つの言葉を知ったからである。

ミハイルは天にいる天使だった。神がミハイルに、一人の女の魂を抜いてくるようにいつけた。そこで、ミハイルが、神の命令を果たすために、下界に下りると、一人の妻が病気で寝ていた。その人は女の双子を生んだところだった。二人の赤ん坊は、母親の傍らでむずむず動いていたが、母親にはもう赤ん坊を乳房に抱き寄せるだけの力もなかった。われわれ読者は、この神のこの命令に残酷さを感じるかもしれないが、ここには重要な真理が書かれている。

唯物無神論の思想の持主は、人の生き死にはすべて偶然で、死んだら無になる、と考える。だが、この運命のきまぐれ論にはなんの救いもない。一方、信仰者は、人の命は神によって与えられたもので、生き死にも神によって決められ、人がその人生の役目を全うしたら、その魂は神のもとに召され、神のもとで永遠に生きる、と信じる。つまり、人間の命は一人ひとりすべて、神仏によって定められたものであり、命には使命が与えられている。寿命の長さでその人生の価値を計ることはできない。すべては天命である。天使や菩薩は、その時がきたら、導きの光となって、一人ひとりを迎えに行く。天使や菩薩は、絶対にその命令に従わなければならない。

けれども、地上にいるわれわれ人間は、天使や菩薩ではない。ゆえに、われわれは自分の命も他者の命も、勝手に粗末にはしてはいけない。たとえば、医療従事者は、目の前にいる患者はもう助からないと思っけていても、あきらめずに、祈りの気持ちを持って、自分の使命、義務である救命につとめなければならない。これは医療従事者に限った話ではない。われわれは皆、さまざまな意味において、肉体的にも精神的にも、誰かの命を預かっているのである。人間関係や仕事での実際の行動、態度、言葉の使い方、気持ちの向け方、考え方、において、われわれは常に誰かの命を預かっている、といえよう。

ミハイルが神の使いであることを知った女は、泣きながら、ミハイルに、こう訴える。自分の夫は死んだばかりである。自分には身寄りが誰ひとりいない。どうぞ、天使様、自分の魂を連れていかないで、この子たちがひとり立ちできるまで、私に子育てさせください。父親も母親もいなければ、子どもたちは育ちようがありません、と。

この地上に生きるわれわれ人間が、この瀕死の母親を見つけた場合は、われわれはその母親の命を救うために懸命の努力をしなければならない。しかし力及ばず、母親が亡くなったとしたら、今度はその遺児を大事に育てなければならない。それが人間の役目である。したがって、神の使いであるミハイルは、このとき、神の言いつけ通り、女の命を抜き取らなければならない。これが、人間と、天使、菩薩の役割の違いである。

ところが女に命乞いをされたミハイルは、情に動かされて、天使としての仕事を忘れてしまい、女の魂を抜き取れず、その場を立ち去って、神のところへ帰ってしまった。ミハイルは、神にそのことを説明した。それを聞いた神は、果たしてミハイルにどんな罰を与えたのか。

『行け、そしてその母親から魂を取れ、そしたら三つの言葉がわかるだろう — 人間の中にあるものは何か、人間に与えられていないものは何か、人間はなんで生きるのか、この三つのことがわかるだろう。そしてそれがわかったら、天へもどってくるがいい』そこで、わたしはまたもとの地上へ飛びくだって、子どもを生んだばかりの母親から、魂を引き抜いてしまったのです。赤ん坊は乳房からすべり落ちました。母親の死骸は寢床の上でころがって、ひとりの赤ん坊を押しつけ、その片足を押しまげてしまいました。わたしは村の上へ飛びあがって、取った魂を神さまのところへ持って行こうとしました。ところが、急に風が起こって、わたしの翼を吹きもぎってしまいました。で、魂だけが神さまのところへ昇って行って、わたしは途中から地面へ落ちこちてしまったのです。⁽¹⁴⁾

気がつくとき、ミハイルは素っ裸で野の中に残されていた。ここからミハイルは人間体験をすることになる。あの世には何次元もの段階があり、それぞれの次元に合った同レベルの魂が集まるといわれている。しかしこの地上では違う。善人も悪人も、肉体的にも人格的にも能力的にも経済的にも多様な人たちが、すべて、一緒に同時代に生きる。人間関係においては、性格や相性の合わない人とも接しなければならない。これは八苦の一つで、「憎しむ者と出会う」という意味の「怨憎会苦（おんぞうえく）」である。愛する人と別れることも多々ある。これは先述した「愛別離苦」のことである。生命を維持するには経済活動をしなければならない。そのため、やりたくない仕事もしなければならない。肉体を持つと煩惱にも苛まれる。これも八苦の一つ「五陰盛苦（ごおんじょうく）」である。人生は我慢の連続である。このように、この世で、肉体を持って生きるというのは不便なことだらけで、大変なことである。肉体を持って生まれてきた以上、八苦の一つ「生老病死（しょうろうびょうし）」から絶対に逃れることができない。人生は、試練が多く、なかなか思い通りにはいかないものである。これも八苦の一つで「求めしものは手に入らず」の意味の「求不得苦（ぐふとくく）」である。それゆえに、人生は一冊の問題集である、この世は魂修行の場である、ともいわれる。

肉体を持ったミハイルは、裸の状態、人生の苦勞を経験させられる。ミハイルは、それまでは、人間の不自由も知らなければ、寒さも知らず、飢えることも知らなかった。それが急に人間になった。ひもじくもなれば、凍えてもくる。ミハイルは、このままでは、肉体上死んでしまう。ふと見ると、礼拝堂があるが、鍵がかかっている、その中に入れない。日が暮れて、ひもじさと寒さで肉体はすっかり弱ってきた。すると、一人の男が手に長靴をさげて、ぶつぶつ独り言を言いながら歩いてくる。ミハイルは、人間になってはじめて、死人のような人間の顔を見たので、その顔が恐ろしくなって、自分の顔をそむけた。ミハイルは、なぜ死人のような顔に怯えたのか。私はこう考える。天使だった時は、神の命令に従い、神に守られていた。天使には肉体がないので、肉体的に死ぬとか殺されるといいう危険がなかった。しかし、ミハイルは今では肉体を持っている以上、常に死の危険にさらされている。これは天使ミハイルには想像できなかったことであろう。この男、セミョーンは飢えと寒さで死にそう、これから家族をどうやって養っていけばよいのか、と自身の生活苦についてぶつぶつ言っていた。とてもこの男には自分を助けることができない、とミハイルは思った。男はミハイルを見て、眉をひそめて、恐ろしい顔つきで、通り過ぎ

ていった。ミハイルは落胆する。けれどもその男は戻ってきた。びっくりしたミハイルはその顔を見つめると、死相が消え、別人のように急に生き生きとなっていた。ミハイルは、その男セミョーンに、神の姿を見た、という。ここでミハイルのいう「死相」とは、悪霊による憑依とも解釈できる。この憑依は「貪瞋痴」と波長同通するものである。死相は神の光で消すしかない。言い換えれば、貪瞋痴を捨て、愛を選び取るしかない。セミョーンは、それができたのである。

ミハイルはセミョーンに助けられた。けれども、家に着くと一人の女が迎えに出てきて、恐ろしい形相でなにやら言い始める。その口からは死の息がもれていて、その腐ったような死の臭いのために、ミハイルは呼吸もできないほどであった。この女、マトリョーナは、ミハイルを外の寒さの中へ追い出そうとした。もしも、そんなことをしたら、マトリョーナもすぐ死んでしまうことをミハイルは知っていた。文章には書かれていないが、ここでわれわれに明かされているのは、「貪瞋痴」の波長同通が呼び寄せしてしまう悪霊憑依の恐ろしい事実である。マトリョーナの激しい言葉に、なぜ、ミハイルが息を止められているように苦しそうにしていたのか。ミハイルは、この死の臭いと最悪の結末に耐えていたのだ。さらに考察を深めると、マトリョーナが追い出そうしている、目の前の相手は、天使である。だがその天使は今、人間の肉体をまとっている。寒い外に、裸同然で追い出されてしまうと、たとえ天使であっても、死んでしまう。言うなれば、マトリョーナは、天使を殺そうとしていたのである。これは悪霊の仕業である。悪霊は天使を嫌う。心の三毒が回っているマトリョーナに容易に憑依することができた悪霊は、憑依したその肉体の力を使って、天使を殺そうとした。さらに悪霊の最終目的は、憑依したその人間を殺すことである。それゆえに、ミハイルは、マトリョーナの死を予測できた、といえる。

しかし、まさにその時、セミョーンがマトリョーナに神の存在を思い出させた。セミョーンが発したあの光の言霊が、悪霊を撃退したのだ。ミハイルはその瞬間を、こう振り返る。「その女も急に、がらりとひとがかわってしまいました。そして、わたしたちに晩のご飯をたべさせてくれて、自分でもわたしを見、わたしもその女を見た時には — その女の顔にはもう死相はなくて、生き生きしていました、わたしはその女の中にも神さまを見たのです。」⁽¹⁵⁾ 先述したように、「死相」は悪霊の憑依である。三毒が消えたマトリョーナは、この時、悪霊が嫌う人間になっていたのだ。ミハイルは、この時、初めて笑った。ミハイルはなぜ微笑んだのか。それは、マトリョーナの優しさに触れたミハイルは、神から与えられた三つの問題の一つ「人間の中にあるものは何か」の答えを見つけ出したからである。ミハイルは、人間の中にあるものは愛である、ということを知ったのである。ミハイルが人間体験を通して理解したこの真理を、この世で生きながら学びを深めて実践していくのが、ほかならぬ、われわれ人間の役目といえよう。

ミハイルには、あと二つ、解かなければならない問題がある。「人間に与えられていないものは何か」と「人間はなんで生きるか」である。人間ミハイルは、その答えを探し求めた。一年が過ぎた。一人の金持ちの男がやってきて、一年の間は形も崩れなければ、縫い目もほころばない長靴を作れと注文した。ミハイルがその金持ち見ていると、その後ろに、ミハイルの仲間の一人である「死の天使」の姿をみとめた。ミハイルはその天使を見て、日の沈まないうちにこの金持ちの魂が召されることを知る。この人は一年先のことまで用意しているが、自分の肉体がこの夕方までも生きていられないことを知らないのだ、とミ

ハイルは思った。ミハイルは「人間に与えられていないものはなにか」という神の第二の言葉を思い出す。答えは、「人間には、自分の肉体のためになくてはならぬものを知ることが、与えられていない」ということだった。そのことを知ってミハイルは二度目の笑顔を見せた、という。金持ちにとってその時必要なものは、生きた体に履く長靴なのか、その夕方までに死骸となった自分が履くスリッパなのか、それを知る力は彼には与えられていなかった、ということを知ったミハイルは悟る。別言すれば、人間には自分がいつ死ぬのかを知る力を与えられていないということを知ったミハイルは理解したのである。このことから、われわれは何を学び取らなければならないのか。私は、次のような学びを得た。自分の寿命も、他者の寿命も、われわれ人間には知ることはできない。命とは、その使命とともに日々神から与えられているものである。命は当たり前のものではない。当たり前と思うのは、傲慢な考えである。そのため、人は一人ひとり、生きているうちは、最後の最後まで、その与えられた使命を果たし続けなければならない。

なぜ、ミハイルには、この金持ちの旦那に「死相」や「死臭」が感じられなかったのか。私は、こう解釈する。その旦那は傲慢な人間ではあったが、悪意を持って、天使ミハイルの命に直接危害を加えようとしたわけではなかった。それゆえ、旦那に憑依した悪霊は、その肉体を利用して、ミハイルに向かって、悪の力を発揮することはできなかった。一方あの時のマトリョーナは、ミハイルの正体が天使であることを知らなかったとはいえ、肉体をまとった天使ミハイルを死なせようとしたのは、事実である。そのため天使を嫌う強力な悪霊がマトリョーナに憑依し、マトリョーナは死相を帯び、彼女からは死臭が強烈に発せられていたのだ。このように、「死相」や「死臭」は天使への攻撃性を象徴するものであると読める。

ミハイルには、神の第三の言葉「人はなんで生きるか」が残されている。これをミハイルは、六年目にして知ることになる。一人の女性が、二人の女の子と一緒にやってきた。ミハイルは、その子のたちのことがわかった。そして、その子たちが死なずに生きていたことを知る。ミハイルは、あの母親が子どものために命乞いをした時に、母親の言葉を信じて、両親がなくて子どもは育たぬもの、と考えていたが、このとおり、他人の女が乳をくれて、二人とも大きくなって、ことを知る。さらに、その女性マリアは、他人の子どものために感動して泣きだした。その時、ミハイルは、その女性の中にも生きた神を見て、人はなんで生きるのかを、理解し、神にゆるされた。それで、ミハイルは三度目に笑った。人はなんで生きるのか。すべての人は自分のことを考える心だけではなく、愛によって生きているのだ、という真理をミハイルは知ることができたのである。子どもを生んだあの母親は、子どもたちが生きてゆくために何が必要であるということを知る力を与えられていなかった。それは、あの金持ちの旦那がその日に自分の体に必要なものは何かを知る力を与えられていなかった、のと同じことでもあった。

ミハイルは、振り返って、考えた。人間であった自分が生きてゆくことができたのは、ミハイルが自分のことを考えたからではなく、通りすがりの人とその妻の心に愛があって、ミハイルを憐れんでくれたからである。二人の孤児が生きてゆけたのは、他人の女の心に愛があって、その子たちを憐れみいつくしんでくれたからである。すべての人は、自分で自分のことを考えるからではなく、人々の心に愛があることによって、生きていっている。神は、人々が心を合わせて一つになって生きてゆくことを望んでいる。人間は愛の

力だけによって生きている。愛によって生きているものは、神の中に生きているものである。神はその人の中にいる。なぜなら神は愛なのだから。

このことを伝えると天使ミハイルは、神をたたえる歌をうたいはじめる。その声のひびきで、小屋はふるえ、天井は裂けて、一本の火柱が、地面から立ち上り、セミョンたちはいっせいに地面へひれ伏す。すると、みるみる天使の肩には翼がはえて、彼は天へ昇っていった。セミョンが気づいたら、小屋はもとどおりに立っていて、家族以外の誰もいなかった。

われわれ人間には、愛がある。この愛は利他、慈悲の心である。これは「神性」「仏性」のことである。われわれは自分の寿命も、他者の寿命も知らされていない。したがって人間は、傲慢な生き方は決してゆるされない。われわれは、愛によって生きている。互いに生かし合うことでしか、生きていけない。地上で人間体験を通してミハイルが学び得たことを、この世でわれわれが実行していくために、われわれ人間にまず求められていることは何か。それは、唯物論思考から脱し、死後生と人間の魂の永遠性を信じ、神や仏といった目には見えない聖なるものを信じることである。

聖なる人

最後にもう一つ、トルストイの短編小説「老人」について少し触れたい。天上界の天使や菩薩のような高次元魂または高級霊の役割は、この世で頑張っている人や苦しんでいる人の手助けをするためにその人たちに知恵のインスピレーションを送ったり、この世での生を終えた人の魂を、導きの光となって迎えにきたりすることである。このような高級霊も、かつては人間であったが、その生前においては、慈悲と利他に生きた人であった、とされている。

仏教に、菩薩道という言葉がある。これは、この世での菩薩としての修行のことであり、自利・利他を兼ね備えて行なう悟りへの実践のことである。しかし、修行僧でもなく、また、本人にもそのような修行の自覚も全くないにもかかわらず、生きながらにして、天使や菩薩の心と行動力を持っている人がいる。この「老人」という作品には、そのような「生き菩薩」ともいえる人物が登場する。読者は、その人物の放つ救いの光によって、心が洗われるのである。

七十歳を過ぎた二人の老人がいた。一人はエフィームという金持ちの百姓で、もう一人はエリセイという金持ちではない男である。エフィームは、まじめで、酒もたばこもやらず、悪い言葉も口にせず、自分にきびしく、しっかりした男である。かつて村老をつとめたこともあり、人々に信頼されていた。彼は大家族の主で、実直で働き者である。しかし、エフィームは、相手を信用することができない性格のため、長男にもきびしい態度をとってしまい、そのためか、親子関係はぴりぴりしている。

一方、エリセイは金持ちでもなければ貧乏でもない老人で、以前は大工をしていたが、いまは、養蜂を営んでいる。エリセイは快活な人柄で、酒もたばこも好きで、歌を歌うのも好きである。穏やかな性格で、家族や近所の人とも仲良く暮らしている。彼は、相手の長所をみとめ、人を信頼している。妻とも息子とも、うまくいっている。みんなに愛されている男である。頭がつると禿げている。このエリセイが、まさに「生き菩薩」である。

エフィームもエリセイもキリストへの信仰心の厚い人間である。人生に一度、エルサレ

ム巡礼をしたい、と思っている。そのためには、百ルーブルという大金が必要である。行って帰ってくるのに、何ヶ月もかかるからだ。金持ちのエフィームはすぐにその旅資金を用意できた。エリセイは、蜂の巣を売ったり、家にあるものをかき集めて売ったり、また、優しい妻や嫁が出してくれたへそくりのおかげもあって、やっと百ルーブルを作った。

巡礼は、ほとんど歩きの旅である。宿の代わりとして、一般の民家にお金を払って、泊まる。地域によっては、巡礼者には無料で宿も食事も提供してくれる家がある。何週間も旅を続けていると、凶作地方へさしかかる。季節は夏である。そこでエリセイは水が飲みたくなった。エフィームは、先に行って、あとでエリセイが合流することにした。ここからわれわれは、天使、菩薩のエリセイの生き方を見せられる。

水を所望するため、エリセイは貧しそうな百姓小屋へ近づいた。小屋はいまにも崩れ落ちそうである。小屋の入り口付近に、やせこけた一人の百姓の男が倒れている。男は、エリセイの呼びかけに反応できないほど、かなり体力が弱っている。小屋に入ったエリセイは、悲惨な光景をまのあたりにする。肌着一枚の老婆がぐったりとしてテーブルの椅子に座っている。その横でやせ細ってお腹ばかり大きな栄養失調の小さな男の子は、泣きながら老婆に何かをねだっている。部屋の中は臭気が充満している。向こうの床には百姓の妻と思われる女が病気で寝ている。この臭気は寝たきりの女がたれ流しをしているからである。みな、飢えのために、いつ死んでもおかしくない状態である。エリセイは、持っているパンを一切れちぎって百姓に与えようとする、百姓は子どもたちにやってくれて、という。その時エリセイは、もう一人女の子が弱って倒れていることに気づく。住人は井戸から水を汲んで、桶を家に運ぶことができないほど、衰弱している。そのため、エリセイは桶に水を入れてきて、それを家族に飲ませた。エリセイは、村の店で食材を買い、薪を割り、炉を燃やし、スープや麦粥を作って、その家族に食べさせた。

老婆と百姓は、エリセイに、なぜこのような状態になったのか、その事情を語った。これまでも貧乏ではあったが、一家はどうか暮らしていた。しかし、今年の飢饉でどうにもならなくなった。食料は尽きてしまった。近所の情けにすぎたこともあったが、そのうち誰も助けてくれなくなった。食べるものがなくなり、草までくいかけた。そのせいか妻が病気で寝込んでしまった。この家には、百姓道具も、服もない。食べ物を手に入れるためにすべてを売ってしまった。草場も耕地も金持ちの百姓に売ってしまった。

エリセイは三日間、この家に泊り、その間、一家に食べ物を食べさせた。そのおかげで、みんな元気を取りもどした。そろそろ、エリセイは巡礼に出かけなくてはならない。だが残されたこの人たちがかわいそうだ。どうしたらよいか悩みながら、エリセイは寝入ってしまう。エリセイは夢を見た。夢の中で、自分は旅支度を済ませて、こっそり、門を出ようとした。すると、お腹をすかせた子どもたちに、「おじいちゃん、行かないでくれ」と引き止められる。家の窓からは、老婆と百姓がじっとこちらを見ているのだった。エリセイはそこで目をさますと、こうひとりごとを言いだした。「ああ、明日は草場も田んぼも請けもどしてやろう、馬も買い、子供たちに牝牛も買ってやろう。それをしねえでは、海を越えてキリストさまをさがしに行っても、自分の心の中でそれを見失ってしまうことになる。まずなによりこの人たちを助けてやることだ」⁽¹⁶⁾ と、決心すると、エリセイは朝までぐっすり眠った。このエリセイの決心は、主イエス・キリストが、遥かエルサレムから届けた声に反応したかのように思える。もっといえば、これは天上界からエリセイに真っ

すぐにおろされたインスピレーションである。遠くの神を拝む人よりも、目の前の苦しんでいる誰かを助けることができる人が、神の近くにいけるのである。

エリセイはこの決心を実行する。エリセイは自分のお金で、金持ちの百姓から土地と裸麦を請け戻す。大鎌も買った。値段の交渉をして居酒屋の亭主から車つきの馬も買う。今度は牝牛を買いに出かける。天使、菩薩のエリセイは、一夜にしてこれらのことをやりとげた。エリセイはその仕事を終えると、こっそり、この家を出て、エフィームのあとを慕って、旅路を急いだ。けれども、所持金がわずかしないことに気づき、エリセイは巡礼をあきらめて、家路についた。無事に帰宅したエリセイを家族は心より喜ぶ。エリセイは、途中で引き返した本当の理由を言わなかった。お金を無駄に使って、仲間が遅れた、神様の導きがなかったただだ、と言って、残りのお金を妻に渡した。留守の間、家族は仲良く平和に暮らしていた。誰一人、エリセイの行動をとがめる者はいない。

エリセイの肉体は、貧しい百姓一家のところらにいたが、その魂は、エルサレムにいたのである。エフィームは、エリセイのことを心配しながら、オデッサから船に乗って黒海を渡り、エルサレムに到着する。復活の大寺院に着くと、多くの巡礼者たちがむらがっていた。ロシア人だけでなく、ギリシャ人、アルメニア人、トルコ人、シリア人もいて、おびただしい群衆だった。エフィームは、聖餐式に参加するために、主のお棺のある洞窟に入った。立ってお祈りをささげながら、お棺の上には三十六のみあかしの燃えている礼拝堂をじっと見ていた。人の頭ごしに見ていると、ふしぎな光景があった。みあかしの真下、一同の先頭に、灰色の長上衣を着た一人の小柄な老人が立っている、つるつる禿げた頭を光らせている。「その小柄な老人はお祈りをはじめて、三度ひくく礼拝をした。 — 一度は正面の神のほうへ、つぎには両側の正教の信者たちのほうへ。老人が右側のほうへ頭を向けた時に、エフィームはそれがまぎれもない彼であることをみてとった。それは確かに彼、ポードロフであった。黒いちぢれた顎ひげ、白毛まじりの頬ひげ、眉、目、鼻、すべての様子が、彼であった。彼、エリセイ・ポードロフその人であった。」⁽¹⁷⁾ エフィームは信じられない。礼拝のあと、エフィームはエリセイを必死に探す、その姿はなかった。勤行のあとで、ほうぼうの宿を訪ねてみたがエリセイはいない。翌日、エフィームは礼拝堂にいくと、主のお棺のすぐそばの一番いい場所にエリセイが立って、祭壇の司祭のように両手を広げていた。その禿げ頭はあたり一面に輝きを放っていた。しかし、礼拝のあと、どんなに探しても、エフィームはエリセイの姿を見つけることはできなかった。それからエフィームは、エルサレムに六週間逗留して、聖地を遍歴した。巡礼を終えたエフィームは、家路に向かった。

エフィームは道々、留守中の家のこと、息子のことを心配していた。エフィームは、去年エリセイと別れたところまで辿りついた。その地域の人たちが、見違えるばかりに、安楽に暮らしていた。田畑の実りもよいようだ。人々はすっかり健康になり、以前の悲しみを忘れていた。すると、一人の女の子が飛び出してきて、その子の家に泊っていくように、エフィームに声をかけた。エフィームはその小屋に入った。ここは、あの時、エリセイが水を飲みに立ち寄った家だった。一家はみんな元気だった。女はエフィームに食べ物をふるまった。老婆も小屋に入ってきた。夜になると百姓が仕事から戻ってきた。自分たちは旅の人に親切にしないではいられない。なぜなら、旅の人のおかげで、ほんとうに生きていくことを教わったからだ、と言う。自分たちは食べるものがなくなって、病気になった。

みんな死ぬところだった。そんな時に、神の使いがやってきて、自分たちを救ってくれた。そのあと、その神の使いは、なにも言わないまま行ってしまった。自分たちは苦しみの中、人や神を怨んでいた。しかしその神の使いのおかげで、自分たちに信仰心も取り戻すことができた。キリスト様、どうぞあの人をお守りください、畜生のような暮らしをしていた自分たちを、あの人は人間にしてくれた、という。

私はこう思う。エリセイの魂は、彼の肉体がこの家にいた時に、主のお棺の横にいたのではない。エリセイの本体魂は、ずっと主のそばにいた。その本体魂は、この地上で、生きた天使、菩薩としての役目を果たすために、エリセイという禿げ頭の小柄な男の肉体にその分霊を宿させていたのだ。したがって、もともと天使であるエリセイには巡礼は必要のないことだったのだ。帰宅したエフィームは、エリセイの家に寄った。以下の引用は、この作品の最後の部分である。

「ごきげんよう、とっつぁんや、ごきげんよう！……無事でもどらしゃったのう？」

「足だけはどうやら行って来たよ、おまえにヨルダンの水を持って来た。いつでも寄って持って行かっしゃるがええよ、それはそうと、わしの骨折りは神さまが受けてくださったかどうかのう……」

「いや、そりゃありがたいことだ。主よ、救いたまえ！」

エフィームはちょっとだまっていた。

「足じゃ行って来たが、魂じゃどうだか怪しいもんだ。それとも、だれかほかの人が……」

「なにごとも神さまのお心じゃよ。とっつぁん、神さまのお心じゃよ。」

「帰りに、わしもあの百姓家へ寄っての、それ、おまえが往きにおくれた……」

エリセイはびっくりして、あたふたしだした。

「神さまのお心じゃよ、とっつぁん、神さまのお心じゃよ。それよりまあうちへ寄んなさいー蜜を一ぱいふるまうから」

エリセイは話をそらして、家事のことを話しだした。

エフィームは嘆息した。そして、自分が百姓家で会った人のことや、エルサレムで彼を見たことなどについては、ひとことも言いださなかった。彼は、この世では神がすべての人に、死の刹那まで、愛と善行とをもってその年貢を果たすように命ぜられたのであることを、さとったのだった。⁽¹⁸⁾

生きた天使や菩薩は、世間の注目を全く求めない。いつも神や仏の御明かし（みあかし）を心に灯して、ひたすら、その御明かしの示す道を歩き続けるのである、愛と善行を果たし続けるのである。エリセイは今日もその御明かしに従って生きている。

トルストイ文学の死生観を振り返る

『戦争と平和』の軍人たちや、アンドレイは、死後生を確信できない唯物無神論思考ゆえに、死を恐れていた。人間が、死後自分の魂の行方はおろか、魂の存在自体すら理解できないと、心に残るのは恐怖しかない。唯物無心論のイワン・イリッチは貪瞋痴の心の三毒に侵され、心がささくれて、利己的になり、死の恐怖に怯えた。唯物無神論者である彼

らの死生観は、彼らから、真の生きがいや生きる力を抜き取ってしまっていた。「人はなんで生きるか」には、人間の中にあるもの、人間に与えられていないもの、人間はなんで生きるのか、というテーマの中に大切な死生観が秘められていた。また、愛を忘れた貪瞋痴の人間からは「死相」と「死臭」が出てくる、ということも描かれていた。エリセイは、目の前の人の命を救うことで、神の愛を実行する。これは、唯物無神論では、決してできない行動である。私は、これらの真理を次回「トウモロコシ蒔き」論後編に生かしていくことにする。

(後編に続く)

注

- (1) トルストイ作 (藤沼貴訳) 『戦争と平和』(一) (岩波文庫, 2015), pp.450-452.
- (2) トルストイ作 (藤沼貴訳) 『戦争と平和』(二) (岩波文庫, 2020), pp.242-243.
- (3) 前掲書, pp.247-248
- (4) レイモンド・A・ムーディ・Jr 著 (笠原敏雄/河口慶子訳) 『光の彼方に — 死後の世界を垣間みた人びと』(TBS ブリタニカ, 1994) こういった証言は pp.25-67に書かれている。
- (5) トルストイ作 (米川正夫訳) 『イワン・イリッチの死』(岩波文庫, 2017), p.58.
- (6) 前掲書, p.89.
- (7) 前掲書, pp.101-102.
- (8) トルストイ作 (中村白葉訳) 『トルストイ民話集 — 人はなんで生きるか(他四篇)』(岩波文庫, 2020), p.11. 「人はなんで生きるか」と「老人」は同書に収められている。以下、この2作からの引用頁数は、同書の頁数を示す。
- (9) 前掲書, p.21.
- (10) 前掲書, p.22.
- (11) 前掲書, pp.31-32.
- (12) 前掲書, p.42.
- (13) 前掲書, p.43.
- (14) 前掲書, p.46.
- (15) 前掲書, p.49.
- (16) 前掲書, p.156.
- (17) 前掲書, p.167.
- (18) 前掲書, pp.177-178.

Received : September, 30, 2022

Accepted : November, 2, 2022

